

須磨海浜水族園 亀崎園長の

あっぱれ!

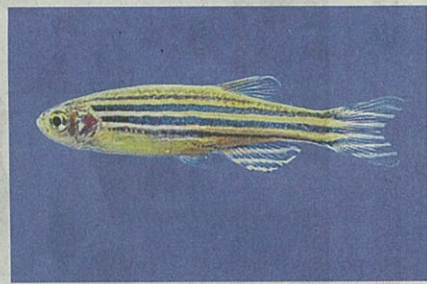
水の動物たち



大陸から持ち込まれ繁殖したと考えられるコイ 琵琶湖の北部などにわずかに生息する日本に昔からいるコイ

5月5日は端午の節句だった。我が家でも孫のために息子のこいのぼりをひっぱり出してきて揚げたのだが、風がなく今一つたなびかなかった。今日はコイの話をしたい。そもそもコイといえは日本の代表的な魚だと誰しもが思うであろう。コイの属するコイ科というグループは、南米とオーストラリアを除く世界中に生息しており、特にアジアには多く生息して、さまざまな種に分化している。日本のコイもその一種だし、タナゴやモロコなどもコイ科である。琵琶湖畔に琵琶湖博物館がある。コイが展示してあるのだが、コイの細長い姿、落ち着いた行動を見て、中学生の

## 滝登らん猛者 今や細々



インドにいるコイ科のゼブラダニオ

コイが昔から日本にいることは貝塚から出る骨や化石で明らかである。つまり、日本のコイは在来種から外来種に知らぬ間に置き換わっているのである。確かに、今そのあたりで見かけるコイは形が違

頃、淀川で釣ったコイを思い出した。しばらく部屋の水槽で飼育していたこのコイも細長く同じ姿をしていたのである。コイは決して珍しい種ではない。ところが、細長いコイは、普段目にするコイとは違っているのである。コイはアジア大陸に広く分布し、しかも、各地で品種改良されている。色彩もさまざまで、色合いによつては何百万円もするニシキコイがいる。強いので、方々に運ばれて放流されたり、養殖されたりしている。日本にも当然移入され、増えている。



子供がたくましく成長するように願って揚げられるこいのぼり

須磨海浜水族園でも日本に古くからいるコイを来園者に見せたいと考え、淡水魚担当に指示をしたが、これが簡単には手に入らない。ところが、世の中、いろんなことをしている研究機関があるものだ。三重県にある水産総合研究センター増養殖研究所で、このコイを琵琶湖博物館から譲り受け繁殖させていたのだ。お願いして貴重なコイを分けてもらった。担当の伊東尚史さんは、元気で暴れるので、輸送も大変だと教えてくれた。車で運ばれてきたコイを見て、心が躍った。昔のコイだ。

ここで大きな問題は、私を含めて多くの人は、日本に古くからいるコイと大陸からやってきたコイを区別してないことだ。そればかりか、あっちへこっちへとコイを移植してしまっている現実がある。川に自然を取り戻そう、などと言って、コイを放流する人たちまで出てくる始末である。

輸送の担当者2人は、その元気に手間取ったことを報告してくれた。昔のコイはとにかく元気で釣り上げると暴れて大変だったという話を聞くことは多い。確かに、日本でコイといえは勢いよく滝を登り、飛び上がる勇壮な魚なのである。日ごろはおとなしいが、いざとなれば猛者となる。そんな魚なのだ。もちろん、こいのぼりは男の子がそんなたくましい人間に育ってほしいとの気持ちの表れなのであろう。ところが今のコイは違う。手をたたけば集まってくるし、口をバカバカと動かす様はおおよそ勇壮とはかけ離れている。釣り上げても、ドテッとしている。知らぬ間に消え去ろうとしている日本のコイをしっかり守って、日本人の在り方というものを見直す場を提供することも水族園の役割と考えている。

次回6月8日



亀崎直樹 (かめざき・なおき) 1956年生まれ。神戸市立須磨海浜水族園園長。東京大学大学院農学生命科学研究科客員教授、NPO法人日本ウミガメ協議会会長を兼務。専門はウミガメを中心とした海洋生物学。